

論 文

## 語られた苦力の声

—— 1930年代前後の「満洲」詩誌の作品を視座に ——

郭 璇

広島大学大学院文学研究科博士課程後期修了

Spoken Voice of “Coolie”

Images of Chinese Laborers in “Manchuria” Proletarian Poetry around the 1930s

GUO Xuan

**Abstract:** This paper studies the images of Chinese laborers (“coolie”) in Japanese proletarian poetry through two representative proletarian poetry magazines, “*Yanren City*” and “*Junk*”, founded in Manchuria in the 1930s. First, this paper categorizes the developmental history of Manchurian poetry and the basic situation and characteristics of these two magazines to reveal the importance of their position in Manchurian poetry circles. Second, this paper summarizes the specific characteristics of “coolie” in the poetries and explores the kind of consciousness that the image of “coolie” reflects. An analysis is done on how Japanese proletarian poets describe the coolies through techniques and content of typical works and the reasons for forming the proletarian poets’ understanding based on their experience. In addition, this paper compares this description of coolies with other works to highlight the sheer uniqueness of the “coolie” image. Unlike the avant-garde artistic expression used in “*Junk*”, the main feature of the poems in “*Yanren City*” is that they directly express, through lifestyle ballads, the inner voice of Manchurian coolies who were under the dominance of imperialism and feudalism. These writers lived in Manchuria throughout the year, or were closely related to South Manchuria Railways Company. Thus, rooted in the social reality of Manchuria, these authors understood the inner heart of coolies and became representatives of the “coolie’s” inner voice.

**Keywords:** Manchuria proletarian poetry; coolie; avant-garde; feudalism; anti-imperialism

## はじめに

1930年代ごろの「満洲」においては日本人作家による文芸運動が発生していた。当時の「満洲文壇」の代表的人物である大内隆雄が、いつの時代、いかなるところに在つても、「一つの文芸興隆の時期の魁けをなすのは詩—或ひは、詩の運動である」<sup>1</sup>と述べたように、在満日本人による文芸運動の先端を走ったのも詩誌であった。これらの詩人たちは、それ以前に短期的に「満洲」に滞在した作家と異なり、日露戦争後、満鉄経営と行政に携わる者の子弟として「満洲」に連れて行かれたケースが多かった。また、「満洲」で青少年時代から暮らし、自らに見合った詩法を熟成させながら詩を書いていた者も多かった<sup>2</sup>。

一方、1920年代から30年代の中国の社会背景として、軍閥割拠という統治の下、地方政治は腐敗し、盗賊が横行していた。加えて、日本をはじめとする資本主義列強の侵略に抵抗するため、様々な労働運動も起こっていた。こうした不穏な情勢と国外からの侵略による不安定な社会情勢の波は、「満洲」にも及んだ。これら在満詩人たちは、時局の迫害を最も受けた苦力をはじめとする下層民衆との遭遇に感銘を受け、プロレタリア的傾向の作品を創作した。『燕人街』、『戎克』などの詩誌は当時の「満洲文壇」における主要なプロレタリア文学運動<sup>3</sup>の集合地である。それまでの「満洲詩壇」といえば、『亜』を拠点とする安西冬衛ら詩人とモダニズムの詩が注目されていた。だが、実際『燕人街』、『戎克』の詩は当時の満蒙の実態を、苦力をはじめとした底辺の民衆の視点から生々しくとらえて見せており、『亜』を圧倒するところもある。

本稿では、これら「満洲」で誕生した主要なプロレタリア詩集における苦力を詠んだ詩、およびそれらの同人による苦力詩の創作を中心に取り上げる。詩はどのように苦力を描写しているのか、また、苦力を通して何を反映させようとしたのかを詩の技法と内容の面から考察する。他の苦力を描写する小説などと比べることで、詩の先端性を解明することも目的とする。

## 第一節 先行研究について

「満洲プロレタリア詩」についての先行研究は多くない。単援朝の論文<sup>4</sup>の他には、西田勝の「漂洋過海の無産文学備忘録」<sup>5</sup>が唯一挙げられる。そもそも、「満洲プロレタリア詩」は学界であまり注目されておらず、それは「満洲

詩」の研究の一環として行われていたに過ぎない。

ところで、2002年頃から<sup>6</sup>学界における「満洲詩」に関する研究も緒についたばかりの段階にある。現時点での集大成的なものとして守屋貴嗣の『満洲詩生成伝』（2012年）がある。守屋は「満洲詩」の源泉である詩誌『亜』と関連する詩人たちの詩作意識を論じ、『亜』を中心に、「満洲浪漫」「満洲短歌」といった詩誌、文芸誌、短歌誌、俳句誌を取り上げ、「満洲詩壇」と「満洲詩」の変遷を考察した。また、日本の植民地文化研究会の創立者である西田勝が主宰した研究誌『植民地文化研究』では、日本国内でも中国現地でも見ることのできない多くの一次資料が紹介されており、また西田勝・西原和海・岡田英樹の座談会シリーズは、資料とその媒体、掲載作品などの基礎的作業状況が充実している。『植民地文化研究』における猪野睦の「満洲詩人」のあゆみの連載は、1920年前後の「満洲詩」の出現から、1945年の終焉までおよそ25年にわたる「満洲詩」の発展史を整理している。西田勝による『燕人街』や、詩人野川隆に関する研究、また西原和海の古川賢一郎研究も代表的成果として挙げられる。

総じて言えば、以上の研究は、当時の経験者の文字記録によって整理されたものであり、当時の史実と基本的な情報を整理することが主な目的となっている。『亜』の掲載作品、そして安西冬衛をはじめとする少数の詩壇の中心人物に関する系譜が明確化された以外、同時代の他の詩誌、及び関連する作品の分析はほとんど見られない。その原因として、この時期の資料は散逸し、未公開資料が多いことが考えられ、「満洲文壇」や詩人の背景など基本的事情の解明すらも困難である。本稿では、これら先行研究を踏まえ作品を考察しながら、詩人に関する一次資料を収集し、満鉄に関わる詩人たちが、苦力を描写した動機について手がかりを提供することも意図としている。

次節では、それらの作品を掲載した詩誌の基本事情と作風、及び詩誌の「満洲詩壇」における位置付けを明確にしたい。まず「満洲詩誌」発展の文脈から整理しておく。

## 第二節 研究対象としての詩誌について

「満洲」の地でいわゆる日本人が詩を書いたのは1920年前後から1945年の「満洲国」崩壊までのおよそ25年である<sup>7</sup>。1920年代初期の頃には既に『暁』『曠野詩人』『赤陽』『あゆみ』『満洲詩人』などの詩誌が出たが、いずれも出ては

消えの、合流離散の中の不安定な胎動期といえる。1924年11月に安西冬衛、北川冬彦、城所英一、富田充らは『亜』を創刊し、これを契機に「満洲詩」が発展し始めた。日本国内の文壇のモダニズムの起源といわれ、前衛的詩人の集合地でもあった『亜』は、1927年12月まで3年間にわたって35冊の発行が続けられた。終刊後、1929年4月城小碓<sup>8</sup>（本家勇）が島崎恭爾、稲葉亨二と『戎克』（1930年12月までに20号まで刊行）を創刊した。そこには古川賢一郎、小杉茂樹、安達義信が同人に加わり、安西冬衛、瀧口武士らが寄稿した<sup>9</sup>。

「戎克」という語は、中国の沿岸や河川などで使われている伝統的な木造帆船を指している。この誌は『亜』の影響のもとに作られ、『亜』の後継誌と言われる雑誌である。その要因として、この詩誌の多くの作品が安西の詩の模倣<sup>10</sup>であり、それらが形式的に超現実主義など前衛性を示しているという特色があったことが挙げられる。西田勝の整理した目次<sup>11</sup>をみると、「港・街頭風景」（島崎恭爾）、「朝・国際市場・麻袋」（城小碓）、「暑中風景抄」（小杉茂樹）といった「満洲」の風景を描写した詩が多いが、一方で社会現実の反映もそこには見られる。

1930年1月の10号から大連で『戎克』と競合するように高橋順四郎<sup>12</sup>が『燕人街』を刊行した。『燕人街』が出版された際に、高橋順四郎は関東州の出版許可が下りなかったため、当時41歳の満鉄日本橋図書館の主事であった橋本八五郎<sup>13</sup>の「万葉集地理考」を連載して隠れ蓑にした話を書き残している。この雑誌の中心人物は編集人の高橋順四郎のほか、その同人たち、つまり古川賢一郎や土竜之介、落合郁郎なども同様に満鉄の社員か、満鉄関係の企業や学校に職を得ている学校の生徒たちだった<sup>14</sup>。

雑誌名の由来については、高橋自身が次のように説明している。「燕人街とは？ / 燕人とは『春来、秋去』燕の如く多年住み慣れた山東を生活にかりたてられ、或者は父子愛妻を残し、或者は一家悉く厳凍の満洲に出稼に来る中国人、俗に山東苦力の事を言ふ / 満洲に散在する、また我々も燕人であり、燕人街ではなからうか？」という記述を残している。燕人とはいわば苦力で、春になると山東省から多くの出稼ぎ者が流れ込み、冬になる前に帰っていくところからつけられた呼称だった<sup>15</sup>。この名をつけた詩人は、苦力に目を向ける一方、自身の運命への嗟嘆も含んでいた<sup>16</sup>。

『燕人街』の作風について、そこに掲載された代表的な評論の主張から把握しておきたい。高橋順四郎は「プロレタリア詩の単純性について」（1930年10

月、1巻9号)において、プロレタリア詩の特徴を「現実性」「争闘性」「反個人主義性」「単純性」の四点にまとめ、特に詩が大衆に理解されるために「単純性」の必要性を強調した。ここでいう「単純性」とは、「日常使用する言語で」表現するということを意味しており、ブルジョア詩にみられるような「シユウルレアリズム詩の難解さ」、「未来派の複雑さ」、「ダダイズムの乱雑」などとは無縁であることを含意している<sup>17</sup>。久呂澄狂介の「自然発生的芸術と吾等」(1930年6月、1巻5号)ではプロレタリア文芸雑誌の『移民文学』の失敗を「左翼理想主義」に帰し、大衆の客観性を認識することなく、また「満洲」の特殊事情も無視したことを指摘した。その一方、作品を芸術的に完成させることよりも、「満洲」におけるプロレタリアートの生活を意識し、反映することに重点を置くべきだと主張した。また、同じく久呂澄の「詩は大衆に理解されねばならぬ」(1930年2月、1巻2号)の文中で、詩の難解さに対するトルストイの批判を引用しながら、詩は「社会的伴侶」であり、「労働歌の歌詩」であり、必然的に「単純明解な、大衆に理解し易い性質の詩でなければならない」と述べ、それと同時に、詩人は「客観的状況の正確なる認識者であり、批判者であり得るもの肯定がなければならない」<sup>18</sup>と説いた。

このように、当時主流の超現実主義などの前衛芸術を一切拒否し、単純さを保ちながら「満洲」の独特さとリアリズムを堅持するのが『燕人街』の基調であることがわかる。

『燕人街』は翌年4月の2巻4号まで、通巻14号まで出されて廃刊となったが、1929年に満洲事変が起こる1931年9月までは、この二つの詩集の同人を中心に、いくつかの個人詩集も刊行された。代表的なのは、『燕人街』の後継誌と言われる高橋順四郎、土竜之介、落合郁郎の『胡同』(1931年4月、奉天胡同社)、『三人集』(1931年12月、奉天胡同社)、古川賢一郎の『蒙古十月』(1931年5月、燕人街発行所)、戎克の同人である城小確など8人が執筆した『塞外詩集』(1930年5月、塞外詩社)、島崎恭爾の『国際都市』(1931年5月、戎克社)がある。

この2、3年ほどの間に「満洲」のプロレタリア詩誌が流行したが、まもなく停刊し衰退していった。停刊の原因として、『戎克』の同人である城小確(本名・本家勇)は戦後の『満洲文芸年鑑』別冊の中で発表した「満洲文学の一部分」の中で、「関東州では定期刊行物は総て許可制であって容易に許可さ

れなかった。普通届出制の出版でも同名で年二回以上は出せなく、それに年一回でも号数は打たれなかったので、定期刊行物ではなく個人的にグループ的に雑誌の名を変えて出していた。文学的な定期刊行物は二、三あったが、満洲事変が始まった昭和6年の末頃、満洲共産党事件<sup>19</sup>があって左翼的な文芸愛好家はその巻添で殆ど警察に検挙されてその余波で、満洲の文学は一時、火が消えたような状態にあった<sup>20</sup>と回想している。具体的な事情は現在でも不明なところが多いが、当局の抑圧を受けた可能性が高いと見られる<sup>21</sup>。

このように、短い期間では存続していたものの、満洲共産党事件を境にプロレタリア詩が没落していったことがわかる。『燕人街』と『戎克』二つはこの隆盛期（1929—1931年）における代表的な詩誌と言える。第一次世界大戦後の未来派、ダダリズム、超現実主義、アナキズム、表現派など同時代の欧米の前衛文芸思潮から影響を受けて、プロレタリア文学と「モダニズム」の文学とが二大勢力として日本国内の文壇の中で拮抗するなか、この二つの詩誌の表現形式も、それと似た形をとったように見える。だが、内容上両誌はともに「満洲」の現実と下層民に注目し、労働者階級に立脚した点に共通性が見られるため、左翼的な詩誌と見なすべきであろう<sup>22</sup>。西田勝は、この二つの詩誌を高く評価し、特に『燕人街』については、「小規模ながら、その主張と運動において、本土日本の「プロレタリア文学運動」の展開を大筋で辿りつつ、特に詩においては十分に読むに耐える多くの作品を産み出していた」<sup>23</sup>と評価している。

以上を踏まえた上で、稿者が整理した満洲事変頃の苦力詩、特に二つの詩誌とその同人を中心に代表的な苦力詩について、以下に考察する。

### 第三節 前衛詩と苦力像

『戎克』において、苦力を描写した代表的な作品として、島崎恭爾「苦力養殖公司」がある。『戎克』の後期は「島崎恭爾の個人詩誌」<sup>24</sup>的傾向があると言われるように、島崎はその中の代表的な詩人と見なすことができる。また、この詩は後に個人詩集『国際都市』にも掲載された、彼の代表作の一つである。詩の全文は以下のようである。

冬を架負された苦力の組織が  
 巧妙な鉋にて鉋められた<sup>25</sup>  
 此の街は鋼の如き  
 弾力もなく骨盤のやうな柔さもない。

灰色の病院、黄い脛を組んだ少年はさてこれから鴉片に似た恋をする。汚れた鳩が降りて来て少年の肋骨に宿る。  
深き肋骨の谿間に夾竹桃の花が咲いた。  
哀調な葬列が裸で通る。  
埋葬された片脚。  
淫売婦は向ふ谷を黄い唾液を捧げる為にヨチヨチとした婀娜姿をして越えて来る。  
(1929年『戎克』9月号、下線は稿者による)

この詩は、形式上、超現実主義などの前衛的な特徴がみられる。いわゆる超現実主義（シュルレアリスム）は、現実を超脱するのではなく、「強度の現実」、「現実以上の現実」を示すものである<sup>26</sup>。また、シュルレアリストたちの詩作の特徴としては、半睡状態の間に、ある無意識的言葉が喚起され、それを早くスピードで文章を書く「自動記述」（オートマティスム）がある<sup>27</sup>。そうした過程を経て生まれた詩は、現実だと仮に思っていたもののなかから無意識に露呈してくるもので、一見不思議にみえるが、あくまでも現実の記録であり、「超現実」の予兆のようなものとされている<sup>28</sup>。この詩の冒頭においては、冬の寒さに耐えかねて凍える苦力という現実のイメージから、無意識的に「鋸にて絞められ」た「組織」、「鋼」といった一連の観念的表象が湧出したのであろう。苦力の肉体を「組織」にたとえるといった人と無機物との組み合わせは、一見すると不条理であるが、活気がなく、沈滞しているという点で相似性が保たれている。

また、この続きの内容を見ると、阿片によってやつれた少年の体の描写は、飯田兼治郎<sup>29</sup>の詩集『青年支那』における「碧山荘阿片窟」に描かれた、「碧山荘」での場面を想起させる。

阿片にしびれた體が、アンペラー一枚の小屋にねむつてゐる安けさ…おそらく見つかることのない阿片窟でひとりの魂を抱いて死ぬのだ<sup>30</sup>。

「碧山荘」とは「福昌華工株式会社」が1926年10月15日設立した、南満洲鉄道株式会社の大連及営口埠頭に設けられた諸作業<sup>31</sup>に従事する苦力の宿舎である。その一方で、いわゆる「阿片窟」とも言われていた。伊藤武雄<sup>32</sup>の『満鉄に生きて』では以下のように記述している。



私はこの荷役労働者の一手供給機関、福昌公司に責任者、杉村さんを訪ね、苦力宿舎・碧山荘を見学しました。苦力に宿舎を与えているということで、日本は厚生施設として誇るべきものとし、満州視察者の見物個所、名所の一つにここはなっています。しかし、その現実には驚くべきものでした。あれだけの重労働に耐えるエネルギーが、極端に貧弱な食事からなりたっていることを私は知ったのです。驚きはこれだけではありません。ここには阿片吸引施設が公然と設けられています。当時阿片は関東庁の専売になっていました。この制度は害毒防止を目的としていると言われていたのですが、この労働者宿舎では盛んに販売している。なんとも、私は了解に苦しみました。あまりにも露骨な植民地経営ではないかと思ったのです。後年の中国内地旅行で、私は日本人が治外法権を利用して、商埠地外の奥地にも入りこみ、モルヒネ販売者として害毒を散布している実状をつぶさに知り、この感をますます深くしました。入社して数年後の在外留学中、ロンドンの「学生運動会館」でインド人学生から、イギリスのインドにおける阿片政策のはなしをききました。これがいかにインド青年を墮落させているか、かれは切々と語ったものです。その時私が思いだしたのは、この大連の碧山荘の光景でした<sup>33</sup>。

ここから読み取れるのは、福昌華工公司在、「阿片窟」の機能をも持ち合わせた所であり、「植民地経営」の一環として苦力や「満洲」の青年たちを精神的に麻痺させ、墮落させていたということである。当時大連の満鉄の沙河口工場で働いていた島崎は、この日本人にとっての観光名所にも行ったことがあり、また阿片により苦力や「満洲」の青年たちの墮落していた風景を目の当たりにしたのであろう。

このような背景があったため、同所はいわゆる「苦力養殖公司」と呼ばれたのだが、これは事実上の苦力収容所を意味する「福昌華工株式会社」に対する皮肉ではないだろうか。そして、詩の舞台はまさにその「苦力養殖公司」に定められているのである。そのうえ、詩においては、「苦力」「少年」「夾竹桃」といった事物に続いて、「葬列」、「埋葬された片脚」、「淫売婦」などが登場している。それらは、無意識的に湧き出た観念的イメージで、予兆のようなものである。こうしたイメージは、一見すると不思議なものではあるが、いずれも意気消沈あるいは死といったことを連想させる。このように、「苦力養殖公司」には、病的な状況にある苦力の表象を通して、植民地主義下の「満洲」下層社会の暗闇と、それに対する詩人の陰鬱な予感とが表現されているのである。



#### 第四節 『燕人街』と苦力像

##### 第一項 搾取された声

前衛的な作風と難解さとは完全に異なり、『燕人街』の詩は前述したように、まず「争闘性」「単純性」といったプロレタリア詩の典型的性質を備えている。その「単純性」は、煩雑な形式が取り除かれて、労働者の直接的な声として伝えてくる。水島勇男<sup>34</sup>の「地獄の底からドンガラんだ」(1930年)は、こうした「争闘性」「単純性」を帯びた、過酷な条件で働く労働者の声を反映するものである。

暗い地獄の底から鋼鉄の音が

ドンガラガラ

人間が血と汗とに煤けて

使はれたる機械の下で呻いて居る

ベルトに運転された旋盤工

鉄槌に叩きつけられた鍛冶工

生きた人間が食べられる地獄だ

地獄ぢや骨まで食べるんだ

だが俺は知つてゐる、知つてゐぞ

人間は動いてゐるんだ

(何日迄も原始時代の動物<sup>(ママ)</sup>じやねえんだ)

ほうら聞えて来る

ドンガラガラ

ありや鋼鉄の響<sup>(ママ)</sup>じやないんだ

人間の頭から出る生活の叫びなんだ

皆よ、地獄の底からドンガラ<sup>(ママ)</sup>ドンと飛び出<sup>(ママ)</sup>そう<sup>35</sup>。

(第1巻第4号、下線は稿者による)

「ドンガラガラ」は鋼鉄などが響き合う擬音語である一方、ノルウェー語で「うなり声」という意味もある。ここでは下層労働者の叫び声をも意味し、掛け言葉の機能を持たせたのであろう。この詩が描き出す「ベルトに運転され」、「鉄に叩きつけられた」旋盤工や鍛冶工のイメージは、同時代のプロレタリア女性作家である平林たい子が描いた小説「敷設列車」(1929年)の苦力の労働

現場を想起させる。「敷設列車」の冒頭には、「彼等は疲れ切って畳まりそうになっていた。敷設機の櫓は新しい軌道の上で左右に躍る」<sup>36</sup>という描写がおかれ、疲れきった苦力が、敷設機の櫓の躍るような動きと鮮やかな対比をなしている。それは、1920年代における世界規模での資本主義の飛躍的發展に伴う機械化の促進を受けて、満鉄が新しい機械を導入したことを背景としている。機械の運用により、苦力たちはその動きに合わせて、一日中犬釘打ちなどの作業を行わなければならなかったのである。このように、新しい生産方式がもたらした機械による人間への支配と搾取を、苦力の精神状態の描写を通して表した。一方、この詩では、「使はれたる機械の下で呻いて居る」とあるように、「敷設列車」と同じ状況にあった満鉄の工場で、機械によって労働者の生活が支配、搾取されていることが描写されている。そして、その労働環境は、労働者を喰らうほどの地獄に例えられているのである。また、人間が「原始時代の動物」ではないという表現は、機械を前にした労働者も「自我と理性を持った人間」であることの叫びであろう。「ほうら聞えて来る ドンガラガラ ありや鋼鉄の響じやないんだ」、「皆よ、地獄の底からドンガラドンと飛び出そう」といった告発と叫び声は、あたかも詩人もまた地獄の工場に身を置いたかのように、労働者の一員となり、過酷な労働環境から逃げ出し、自由な生活を求める激しい叫び声を伝えようとしたのである。

## 第二項 生活の声

このような、「圧迫」、「搾取」は『燕人街』における苦力詩の一つの主題である一方、久呂澄狂介が指摘した「労働者の生活」はもう一つの素材となる。代表的な同人の一人である落合郁郎の「苦力の詩」（1931年）を取り上げる。

走り去るものを追ふなよ。  
 彼奴は野鷄と一緒にくたばる連中だ。  
 十年の計なんか汗と共に流してしまへ。  
 俺はお前を信用しているお前も俺を……、それだけでいいんだ。  
 野が無限でも、俺達(ママ)あ歩こう

百靈よ、高くさえずれよ、足が軽いぞ  
山東は奴等にとられてしまつた。  
季節だつて俺達にや無関係だが、

百靈よ、お前が鳴かないと淋しくなるんだ

昨日知った友だつて、別れるのはつらい。  
だが笑つて送るぞ、彼奴は元気で رفتつたから。  
胃の腑が一ぱいになつたら眠くなつたから眠ろう。  
明日はいい天気になつてくれ。  
(第2巻第2号、下線は稿者による)

1928年の日本軍の山東出兵により済南が占領された事件を背景として、多くの民が故郷を追われ「満洲」に流亡した。よって、この詩は当時の「満洲」の苦力の大多数に共通した声と見なされよう。

「山東は奴等にとられてしまつた / 季節だつて俺達にや無関係だ」「胃の腑が一ぱいになつたら眠くなつたから眠ろう」という描写にあるように、この詩に表象された苦力の性格は、平林たい子が描いた苦力とも似ている。たい子は苦力について「いつも戦乱の巷になる故郷を持っている彼等は土地や財産というものに執着する習慣を持っていない」<sup>37</sup>と描いているように、彼らは戦乱の世に転々として他郷に流れ着いても、どのような境遇にあつても心安らかで、また、足るを知るといふ素朴な観念を持っている。では、なぜ日本人作家はこの点に注目したのだろうか。それは中国人には「安土重遷」（土に安んじて遷を重る）の思想が根付いていたため、土地への深い執着を持っていることとも関わると考えられる。だが、たい子が「彼等は土地や財産というものに執着する習慣を持っていない」と拘泥しない性格を描写したことと比べると、この詩においては、日本軍によってやむを得ず土地を追われたという怨恨も多少含まれている。これこそが苦力の心の声に近かつたのではないか。

だが、前節で取り上げた水島の詩の激しい抵抗とは異なり、この詩は、怒りや怨恨の声よりも、むしろ全体的に明朗かつ軽快な雰囲気には溢れている。原詩に注があるように、「百靈」とは中国人の愛玩する鳥である<sup>38</sup>。また、中国の文化において百靈は声がよく響き耳に心地よく、活気に満ちて美しいという意味が付与されている。この希望のシンボルを借りて、明日への期待が仄めかされ、苦力たちの底知れぬ力への予感的なものが表現される一方、戦争と帝国主義への拒否感も暗示している<sup>39</sup>。

本詩の作者である落合郁郎は営口で生まれ、満鉄関係の仕事に従事した人

物である<sup>40</sup>。彼は「満洲詩壇」において、活躍していた一人でもあった。『燕人街』の同人の中で、最も精力的に作品を発表していた。当時は若手の詩人<sup>41</sup>であり、合計25篇の作品がある。また1931年4月に高橋順四郎、土竜之介とともにプロレタリア詩集『胡同』を、12月には奉天で詩集『三人集』を出版した。彼と下層労働者との関係については明らかでないが、同じく『燕人街』に掲載した作品は民衆の重税問題を反映する「パニックの春」、また軍閥政治がもたらした家庭への不幸を描写した「蒼い道」などがあり、「満洲」の政治や社会の暗い部分を掬い取っているもの<sup>42</sup>が多いのである。こうした社会現実に直面し、軍閥や重税など当時の「満洲」でしかなかった問題を表現するのは、前述した詩集の提唱した作風としての「リアリズム」と「満洲の特殊事情」<sup>43</sup>の反映であろう。

### 第三項 満洲民謡に取材した詩

以上は詩人が苦力と一体となり、苦力の視点から彼らの生活を語った詩である。しかし、いくら彼らが苦力の視点から語ろうとしても、労働者自身の意思はわからない。そこで、労働者の声に耳を傾けようと、『燕人街』の詩人は当時の労働者自身が歌った民謡に取材した作品を生み出した。加藤郁哉の詩「燕人群」（1931年）はその代表的な詩である。

あすは著くのか  
甲板の板目  
日がな日の下  
夜は星の下

荒れた海原  
耕すやうな  
辛い生計が  
待つのおやないか

桃の季節に  
戦争が三年  
息子とられた  
あの土地すてて

ひらりと、くらりと  
満洲へ渡る  
つまされ燕に  
身が細る  
(第2巻第1号)

本詩は「満洲民謡」と標注されていることから、翻訳された作品であると考えられる。この中国語の民謡の原作は確認できないが、中国語の統辞法と一致しておらず、また定型詩の形式から判断すれば、詩人は日本語のリズムに合わせて訳した可能性が高い。

「燕人」については前述した通り、加藤郁哉が1939年に今枝折夫という筆名で出版した満洲案内書『満洲異聞』<sup>44</sup>において、同名の紹介文を書いている。その中で、「燕のように季節に応じて往来する移民のこと」を「所謂山東直隸苦力」<sup>45</sup>であると解釈している。この詩は内容から見れば、戦争により家族が離散した苦力の親の心の声であるとわかる。息子が戦争に従軍し長年にわたり帰らず、住んでいた土地に望みも期待も持てず幻滅しているが、生活を続けるためには「満洲」で生計を立てなければならない。「つまされ燕に、身が細る」とは、こうした居場所がなく、転々とした生活の辛さを形象化したものである。前述の落合郁郎の「苦力の詩」における明朗洒脱な苦力の声と比べると、この詩に見られる苦力の声には、現実への無力感と恨みの基調が見られる。

詩の作者である加藤郁哉は、当誌が創刊される前に『亜』、『第一短詩集』(1926年2月)に何度か作品を寄せていた。個人詩集『逃水』(素人社、1929・9)を刊行していた安西冬衛が大連に現れるまでは「満洲詩壇」の第一人者<sup>46</sup>であった。彼は1898年5月に生まれ、東京外国語学校露語科出身で、幼時より関東、近畿、九州、朝鮮、「満洲」を転々とし、後に満鉄にかかわる仕事に就いた。1928年に与謝野晶子と与謝野鉄幹が、満鉄の招きにより「満洲」旅行をするが、その際夫妻をガイドしたのも彼で、当時は「錦州鉄道局総務課長」の肩書きを持っていた<sup>47</sup>。

このような、貧しい境遇におかれたこともなく、いわば国策会社の満鉄に関わった加藤が苦力に注目した理由は何であろう。

実際、当時の中国民謡の研究に携わっていた在満日本人がこの時代に活躍しており、多くの研究成果を残していた。例えば、1930年には稲川浅二郎の

執筆した『満洲民謡曲譜』（中日文化協会）が発行された。また、松本二郎、谷山つる枝、七理重恵なども代表的な民謡研究者である。このような個人の他に、組織主導の研究も多かった。一例として、満洲事情案内所は1936年から1944年まで報告として単行本が5回にわたり出版された『満洲の伝説と民謡』、満洲国通信社から刊行された『満洲の民謡』（1939年）などが挙げられる。加藤郁哉もこうした中国民謡研究のブームに乗った著名な一人であり、彼の満洲民謡の研究実績は当時の雑誌『満蒙』に多く見られる。例えば、「満洲」の民謡調から翻訳した作品シリーズとして、「国境名産たるばかんの唄」、「白塔名産の唄」、「名産黄花魚の唄」、「嫩江的月」、「鳳凰山娘々宮祭字典の賦」などがある。いずれも「満洲」の風物や風俗に関する唄である。

このうち、1940年の『満洲の伝説と民謡』の序文を見ると「民情風習を究め、伝説を知ることは、その国の文化や、歴史や、国民性の生きた理解の上に最も重要欠くことの出来ない事柄である…（中略）…日本人に対する満洲民情の常識の涵養に資し、併せて満洲国文化工作に幾分の寄与をなし得」<sup>48</sup>るものであると述べられている。

これについて、同時代の雑誌『満蒙』を研究する王占一は、『満蒙』に掲載された民謡を考察する中で、当時の在満日本人は中国の民謡、童謡をその芸術性（メロディーなど）からではなく、その内容面から研究していたことを明らかにした。またその目的が、在満日本人による中国人民謡の研究は明確な目的、つまり中国事情、特に国民性を見出そうとすることであったと指摘している<sup>49</sup>。

加藤の場合も、下層社会の民衆に同情心を寄せているというより、むしろ本土にはない「満洲」の風俗や人情に興味を持つ面が大きい。「燕人群」以外に、彼の「満洲」に関する作品の中で、下層民衆に注目した作品は確認できない。前述した『満洲異聞』、あるいは後に刊行された『満洲こよみ』（1939、満鉄社員会、大連）の、いずれも「満洲」社会、あるいは「満洲」の風景と風俗習慣を紹介する案内書であった。彼の「燕人群」における苦力への視線は、「満洲」の一風物を眺めるものに過ぎなかったと言えよう。

#### 第四項 帝国主義への抵抗の声

「満洲」地域の民謡に関心を持っていた『燕人街』の詩人たちは、単に「満洲」の風俗と人情に興味を寄せる者ばかりではなかった。中には、社会主義

的な傾向が見られる詩人も存在した。古川賢一郎<sup>50</sup>はその代表格であり、当時の詩壇における有名な詩人の一人でもある。『燕人街』での彼の作品は、例えば、「鳳陽花鼓の『盼情郎曲』」などの民謡から翻訳した非戦の意志が明らかであるものがある一方、例えば「理髪舗」（1930年創刊号）「少女・蛾子」（1931年第2巻第2号）「公主嶺雜記」（1930年第1巻第10号）のような「満洲」の風景や過酷な民衆の生活の一面を切り取った創作もある。いわゆる「公主嶺」は吉林省にある、「南満と北満の分水嶺」で、「海拔六百九十七尺」<sup>51</sup>の地名である。この詩は、古川がそこで働き生活した経験を散文詩の形で断章的に記述したものである。苦力に関する叙述を抜き出すと以下ようになる。

「何先生。熱い高粱酒をいつばいどうだい」  
 「馬鹿言へ。俺んところには、甘くて苦くてとろりとした黄金色の水があるよ。」  
 「へい？」劉には日本人の形容詞がよく呑み込めなかつた。  
 （何氷江と云ふのは私の字号である。苦力は私を何と呼ぶ）

○

ほい！あんたがかい。その女に捨てられたんかい。アホラシイ。  
 おい！皆んな来い。女に捨てられた話だ。在恋愛裏焦灼的着叫着的蟬還不如不叫的萤火将身都焦灼了 でせう。  
 益々アホラシイ。  
 山東からの苦力頭・崔は頭のいゝ奴だ。「アホラシイ」と云ふ日本語を大分うまくつかふやうになった。  
 （第1巻第10号）

「在恋愛裏焦灼的着叫着的蟬還不如不叫的萤火将身都焦灼了」<sup>52</sup>（鳴く蟬よりも鳴かぬ螢が身を焦がす）というくだりは当時の中国の散文家、翻訳家である周作人が日本の民謡から翻訳した恋に関する「現代白話文」の詩である<sup>53</sup>。これ自体に特別な意味はないと思われるが、苦力たちが日本語、あるいは中国語で話しても、作者と思しき「私」と違和感なく意思疎通ができ、生活臭のする、日常的な交流が見られる点で象徴的である。この苦力とのエピソードからは、互いの親密な仲間関係が表現されている。前述した『燕人街』の詩人は、苦力と自らを一体化させ、苦力の視点から語ることで自らの日本人としての身分を隠蔽したが、古川の場合はむしろ日本人としての自己と苦力との境界線をはっきりと意識していると言える。それがむしろ、他の詩人に比べ苦力たちとの距離を縮めているのである。



これには、かつての古川の下層体験が深く関わっている。日本国内で苦難と窮屈さを経験し、家族のために「満洲」まで来て生計を図らなければならなかった彼は、満鉄の「地方土木課」に勤務した時、夏は現場で裸体になって苦力たちと共に働き、苦力たちと同様の生活を送っていた。また、彼は関東軍が中国兵をなぶり殺した後の中国兵屍体処理に動員されたことがあり、関東軍の謀略と暴行、「満洲」軍事占領に至る内情をも知っている<sup>54</sup>。

こうした侵略者と植民者双方としての経験があったため、古川は苦力と相対したとき、自分が彼らにとってどのような存在であったかを明確にしている。詩の中で「私は苦力達の汚れた酒宴の中で 針金のやうな日本人の心情をとかさうとしてゐる。あのけばけばしい植民都市…しかしなほ、私も哀しき日本人であるか」<sup>55</sup>（「白日—公主嶺にて」1932年8月）と書いているように、彼は日本人であることに葛藤を抱いていた。また、「ああ ごうまんな日本人に嘔みつきたい」<sup>56</sup>（「冬の眼玉」1929年10月）とも記しているように、そのことと向き合い、日本人への嫌悪を吐露した。

『燕人街』には掲載されていないものの、彼が1929年に出版した個人詩集『老子降誕』の中の、「苦力詩篇」と題されたシリーズの詩に「心臓」という一篇がある。

我們的心臓の位置を知っている日本人はゐない。  
 見ろ！城壁より厚い胸の筋肉を—  
 日本人の蒼い手は  
 心臓の鼓動さへ探しあぐんでゐる<sup>57</sup>。

この詩が創作された1920年代は中国の白話文運動の発展期にあたり、この詩の形式も現代中国の白話詩とよく似ている。また、「我們」は「我ら」の中国語の表現である。古川は、このように中国語を「意識的にまで用ひたこと及び、現代中国語白話詩集の体裁を模倣したこと等はすべて試みである」<sup>58</sup>と詩集『蒙古十月』の「自記」の中に記述している。この詩において、古川は中国語の「我們」を用いて、完全に中国人の苦力と同じ側に立っている。また、「日本人の蒼い手は…（中略）…探しあぐんでゐる」と自らを日本人という範疇から外し、苦力たちと対立した日本人を批判的な視点から描いている。「心臓の位置を知っている日本人はゐない」というのは、日本人支配者は苦力を支配しようとしても、その心を掴むことができないことを示唆したものと

考えられる。また、「見ろ！城壁より厚い胸の筋肉を一」は、たびたび描写される苦力の体躯の丈夫さに加えて、日本人と心理的隔たりがあるという二重の意味が含まれているのであろう。このように、作者の植民に反対する姿勢が、苦力の支配者側への抵抗の声を通して表現されている。城小碓は古川の『老子降誕』について評価する際、「写实的乃至は感傷的に、曠漠たる又は国際的な満洲をよく描写している。／雪上の首、海底の街と別れる、亦は春の馬賊、支那、實際羨ましい程の描写だ。…氏は満蒙の真実の測量者であると共に実見者であり、又我等の郷土の心臓である苦力の正しい代弁者である」<sup>59</sup>と述べた。古川は苦力たちと一体化するに留まらず、さらに苦力たちと情情的に自らを対立した日本人支配者を批判的な視点から描いており、その意味において「苦力の代弁者」と言えよう。

### 第五節 満洲事変後の苦力詩

前述したように、誕生したばかりの「満洲」でのプロレタリア文学は満洲共産党事件により氣息奄々となった。これまでに取り上げてきた詩人のうち、島崎恭爾は満洲共産党事件にて当局に検挙された。反帝国主義の詩を書いた古川賢一郎は時局に迎合する戦争詩の方に傾いた。そのほか多くの同人達についてもその後、「満洲」での創作活動が表に見えなくなってしまった。

しかし、こうした中、ゲリラ的に苦力像を通して時局への抵抗を堅持する詩人がいた。例えば、1933年に稲葉亨二は大連で詩集『夜行船』を出版した。この詩集の中には苦力群像の写真があり、写真の下に、「人家婦女供他睡／他的婦女陪官睡／強盜土匪他不管／只管有錢的百姓来問罪」<sup>60</sup>という一文がある。

実は、これは部分的内容が省略された、労働者が作った「風刺詩」である<sup>61</sup>。この文の前には「警備隊、尽不对、人家酒食供他醉」<sup>62</sup>という文がある。この詩からは、当時の警察が地方の民衆を圧迫し、上役に対して媚びへつらい、土匪と結託していた事実が反映されている<sup>63</sup>。つまりこれは、「満洲」の官僚主義への風刺と見られる。

また、詩集の中の「夜行船」と題とする詩は、山東省の龍口から出航する「永利号」に乗った中国人労働者の運命を描出している。

中華は神經喪失 不治の病に眠る 闇を罩めて秘かに龍口を解した「永

利号」

山東の雑草を満載して 渤海の夜陰に民歌を放つてゐる 船長邦傑は突如戦を覚えて

元宝を抱いたまゝ海中に身を委ねた 船長を失った火輪船は 闇の支配に任せて 消え行く爐火を俟つより外はない 不安を身に帯びた工人群が流亡の相を知つて

新たな燃料を 船板に焚きはじめた 野花は夜開く 中華は亦動脈に針を入れたらしい

猪野睦の解釈によると、この詩の中には「省城を繞る黄旗の渦」「塞外民族の血に染む耕地」「海底に流亡した山東の難民共は古生代の生物に生氣を吹き込んでいる」といった詩語が散りばめられている<sup>64</sup>。1931年の満洲事変を経て、また翌年3月に黄色の旗を掲げる「満洲国」が建国されたことを考えると、「省城を繞る黄旗の渦」は「満洲」全土が日本に占領されたことを象徴しているのではないか。また、「塞外民族」は中国北方民族の呼称であるため、「塞外民族の血に染む耕地」とは「不治の病に眠」る「満洲」民族の運命の象徴であろう。猪野は、この時期にはこうしたゲリラの出版が主であり、検閲というわけにもいかず、詩もシンボリックに韜晦させることにより難解さが増したことを指摘している<sup>65</sup>。このように、満洲事変後の詩人達は労働者を描写することを装い、実質的に中華民族の運命を前景化することで、帝国主義への抵抗を継続したのである。

## おわりに

苦力の声はその時代の反映である。これら苦力詩の多くは、苦力の声を通して詩人たちの内面を表していた。それらの声から、口語体で生活を基調とした、多様な苦力像がみられ、当時の資本主義からの抑圧、暴力といった当時の「満洲」社会の暗闇が表現され、その矛先は日本の帝国主義へと向かった。

それ以前の紀行文や小説などの表現形式と比べると、前衛詩は芸術的な表現であるのに対して、『燕人街』の多くの苦力詩は生活的、歌謡的である。形式的には自由詩や定型詩、散文詩など様々であるが、いずれも封建主義や帝国主義に支配された「満洲」の苦力の独自性が、簡潔に表象されている。

『燕人街』の同人達は、「寺兒溝あたりの支那人の生活は、日本人の（イン

テリと云ふ意味を含めて) 常識などで同情したりフンガイしたりされたくないものだ<sup>66</sup>と語る。それらの日本の詩人達は長年にわたって「満洲」に在住した者が多く、満鉄に関わりつつも、満鉄の下層労働者でもあり、「満洲」の現実社会に深く根ざしていた。彼らは苦力の内面を知り、苦力への視線には同情や憤慨は見えず、それ以前に見られたエキゾチズムによるものとも異なる。彼らは、プロレタリア作家としての階級的まなざしのみならず、ヒューマニズム及び「満洲」社会のさまざまな問題に直面したリアリズムをも併せ持っていた。彼らは苦力たちの心の声に迫り、苦力の代弁者であることを志向していたと考えられる。軍国主義の当局の圧力のもとで、当時中国人の内面を掘り下げた作品は珍しい。『燕人街』を評価する守屋貴嗣の言葉を借りて述べれば、左翼思想の隆盛と戦時下の状況にあって、これらの詩誌における苦力詩作品は「同時代的」<sup>67</sup>であった。時間と空間、あるいは時代と地政の同時性をもつ点において、「『亜』を乗り越え」<sup>68</sup>るものだったと言えよう。

付記：

本論は未公開の博士論文の一部を修正したものである。また、『燕人街』の本文は、西田勝氏の整理による未公開の資料、及び『植民地文化研究』に掲載された新発見資料から引用したものである。西田氏から大変貴重な資料を提供していただいた。ここに記し、謝意を表したい。

注：

<sup>1</sup> 大内隆雄『満洲文学二十年』、国民画報社、1944年、98頁。

<sup>2</sup> 猪野睦「『満洲詩人』のあゆみ(1)」、『植民地文化研究』創刊号、植民地文化研究会、2002年6月、18-19頁を参照。

<sup>3</sup> 「満洲のプロレタリア文学運動」を考察した中国の学者である単援朝は、満洲文壇を身をもって経験した大内隆雄が記録した『満洲文学二十年』をもとに、その運動の主たる活動を『移民文学』、『大陸文学』、『街』及びその後の「満洲文芸研究会」と『満洲文芸年鑑』を中心とした雑誌、と『燕人街』、『楮土文学』、『戎克』といった二つ業績としてまとめた。(単援朝「植民地‘満洲’的無産階級文学運動」『漂洋過海の日本文学』、社会科学文献出版社、2016年、22頁を参照。)

<sup>4</sup> 単援朝「植民地‘満洲’的無産階級文学運動」『漂洋過海の日本文学』、社会科学文献出版社、2016年。

<sup>5</sup> 西田勝「漂洋過海の無産文学備忘録」、『東北亜外語研究』2期、2015年7月、23-26頁。西田勝は満洲のプロレタリア文学を三つの類型に分け、それぞれを日本の作家が

満洲の雑誌などに投稿した作品、満洲で発生したプロレタリア運動に誕生した作品、と日本人作家が満洲で創作した作品とした。また、各種類代表作家および作品を概観的に論述した。

<sup>6</sup> 『植民地文化研究』における猪野睦の「満洲詩人」のあゆみ (1) (2002年6月)の掲載から始まる。

<sup>7</sup> 猪野睦「満洲詩人」のあゆみ (1)、『植民地文化研究』創刊号、植民地文化研究会、2002年6月、18頁参照。「満洲」は1945年前のことを指すため、1945年以降も詩を創作する日本人が東北地域に残ったが、それは本稿の考察の範疇に入れない。

<sup>8</sup> 以降、城小確は大連の詩の中心人物になった。城小確は1905年に京都で生まれ、14歳(1919年)で大連へ渡った。大連の鈴鹿商店に勤め、のちに同店経営の丸辰醬油に移った。(守屋貴嗣『満洲詩生成伝』、翰林書房、2012年、253-254頁を参照。)

<sup>9</sup> 猪野睦「満洲詩人」のあゆみ (1)、『植民地文化研究』創刊号、植民地文化研究会、2002年6月、21頁参照。

<sup>10</sup> 守屋貴嗣『満洲詩生成伝』、翰林書房、2012年、247頁。

<sup>11</sup> 西原和海 岡田英樹 西田勝「座談会 詩誌『亞』から『戎克』、『燕人街』へ」、『植民地文化研究』7、植民地文化研究会、2008年7月、62-63頁。

<sup>12</sup> 高橋順四郎はそれ以前に左翼系の雑誌『赤い街』も主宰していた人物である。

<sup>13</sup> 橋本八五郎は当時万葉集の研究者として満洲の読書会でもよく知られている。西田勝「プロレタリア詩誌『燕人街』の登場」、『植民地文化研究』5、植民地文化研究会、2006年7月、75頁。

<sup>14</sup> 西田勝「プロレタリア詩誌『燕人街』の登場」、『植民地文化研究』5、植民地文化研究会、2006年7月、75頁を参照。

<sup>15</sup> 猪野睦「満洲詩人のあゆみ (1)」、『植民地文化研究』創刊号、植民地文化研究会、2002年6月、22頁。

<sup>16</sup> 単援朝「植民地‘満洲’的無産階級文学運動」、『漂洋過海の日本文学』、社会科学文献出版社、2016年、10頁を参照。

<sup>17</sup> 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄 (5) 評論篇 (下)」、『植民地文化研究』9、植民地文化研究会、2010年7月、155-156頁及び54頁。

<sup>18</sup> 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄 (3) 評論篇 (上)」、『植民地文化研究』7、植民地文化研究会、2008年7月、181頁。

<sup>19</sup> 満洲共産党員事件とは、満洲事変による文学停滞に追い打ちをかけた事件であった。当時の文学関係者はこの事件についてほとんどが口をつぐんだまゝであり、その後も「ある事件」という以上にはふれられずにきた。(猪野睦「満洲詩人のあゆみ (1)」、『植民地文化研究』創刊号、植民地文化研究会、2002年6月、27頁を参照。)

<sup>20</sup> 西原和海『満洲文芸年鑑別冊』、葦書房、1993年9月、13頁。

<sup>21</sup> 西原和海・岡田英樹・西田勝「詩誌『亞』から『戎克』、『燕人街』へ」、『植民地文化研究』7、植民地文化研究会、2008年7月、57頁を参照。

<sup>22</sup> 『戎克』より『燕人街』の傾向性の方が明らかである。両者とも当時の満洲文壇に

おける主要なプロレタリア文学運動の代表的な詩誌であると単援朝が指摘した。(単援朝「殖民地『満洲』的無産階級文学運動」、『漂洋過海の日本文学』、社会科学文献出版社、2016年)

<sup>23</sup> 西田勝「プロレタリア詩誌『燕人街』の登場」、『植民地文化研究』5、植民地文化研究会、2006年7月、73頁。

<sup>24</sup> 大内隆雄『満洲文学二十年』、国民画報社、1944年、157頁。

<sup>25</sup> 「合わせ目などのゆるんだ所を打ちつけてしっかりとしておく」の意。『日本国語大辞典 第二版』を参照。

<sup>26</sup> 「超」は「超スピード」の「超」の用法に近い、「強度」、「過剰」の意味を含む。巖谷國士『シュルレアリスムとは何か』、ちくま学芸文庫、2002年、8-23頁を参照。

<sup>27</sup> 巖谷國士『シュルレアリスムとは何か』、ちくま学芸文庫、2002年、30-39頁を参照。

<sup>28</sup> 巖谷國士『シュルレアリスムとは何か』、ちくま学芸文庫、2002年、26頁を参照。

<sup>29</sup> 1895年生まれ、1949年に没した昭和の歌人の一人である。1916年、前田夕暮を知り「詩歌」に参加し、1930年「女体は光る」を刊行。他に発禁処分となった長篇小説「神を射るもの」がある。(出典：日外アソシエーツ『20世紀日本人名事典』、2004年)

<sup>30</sup> 飯田兼治郎『青年支那』、紅玉堂版、1931年、81-83頁。

<sup>31</sup> 詳細的には、南満洲鉄道株式会社総務部資料課編『満鉄要覧』、南満洲鉄道、1932年、150-151頁を参照。

<sup>32</sup> 元南満洲鉄道調査局勤務。

<sup>33</sup> 伊藤武雄『満鉄に生きて』、勁草書房、1964年、58-59頁。なお、下線は稿者による。

<sup>34</sup> 管見の限り、この詩人に関する資料はほとんどない。

<sup>35</sup> 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄(続)」、『植民地文化研究』6、植民地文化研究会、2007年7月、138頁。

<sup>36</sup> 『平林たい子全集』第1巻、潮出版社、1979年、282頁。

<sup>37</sup> 『平林たい子全集』第1巻、潮出版社、1979年、283頁。

<sup>38</sup> 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄」、『植民地文化研究』5、植民地文化研究会、2006年7月、147頁を参照。

<sup>39</sup> この詩の考察について、管見の限り、猪野氏の論文の言及のみである。猪野は「燕人たちの底知れエネルギーへの予感のようなものをかいた」と論じた。ここではそれを参考した上で、詩人の意図も分析した。猪野陸「満洲詩人のあゆみ(1)」、『植民地文化研究』創刊号、植民地文化研究会、2002年6月、25頁。

<sup>40</sup> 猪野陸「満洲詩人のあゆみ(1)」、『植民地文化研究』創刊号、植民地文化研究会、2002年6月、18頁。

<sup>41</sup> 1931年12月に『三人集』を出版した時、彼の20歳の誕生日を迎えた。

<sup>42</sup> もう一つのテーマは、「現実の闘争に一步踏み出せない心的葛藤を歌ったもの」である。(西田勝「プロレタリア詩誌『燕人街』の登場」、『植民地文化研究』5、植民地文化研究会、2006年7月、81頁)

<sup>43</sup> 前述した久呂澄狂介は「自然発生的芸術と吾等」の中で「満洲の特殊事情」に言及した。また「プロレタリア・レラリズムと満洲の特殊性」という評論の中でレアリズムも是認した。

<sup>44</sup> 出版地は撫順。出版社は月刊満州社。これは満洲の案内書であるが、多くの旅行ガイドブックとは趣旨が異なり、「内地」旅行者と在満日本人の間で交わされた軽妙な会話の中で、「満洲」の裏社会を紹介するユニークな案内書である（引用元：植民地文化研究会編『満洲国文化細目』、不二出版、2005年、179頁を参照。）

<sup>45</sup> 今枝折夫「燕人群」『満洲異聞』、月刊満州社、1939年、15-16頁を参照。

<sup>46</sup> 安西冬衛と親しい間柄でもある。彼は今枝折夫の筆名でも文壇で活躍していた。（守屋貴嗣『満洲詩生成伝』、翰林書房、2012年を参照。）

<sup>47</sup> 守屋貴嗣『満洲詩生成伝』、翰林書房、2012年を参照。

<sup>48</sup> 満洲事情案内所『満洲の伝説と民謡』、満洲事情案内所、1940年8月、序文。

<sup>49</sup> 王占一「戦前戦時における中国民謡の機能：雑誌『満蒙』を中心に」『名古屋大学人文学フォーラム』1巻、2018年3月、95頁。

<sup>50</sup> 1903年、香川県出身。酒造業、雑貨屋を営んでいた家業が傾き、高島炭鉱に職を転じてから一家で長崎県に移る。高等科を終えて長崎三菱造船所に入所し、卒業後造船所に就職。19歳の時に父が病死するが長男の賢一郎は、母、第三人、妹二人の家族を養わなければならないが、1923年8月、20歳の時に一家の生活環境の打開を図って渡満した。（西原和海編『古川賢一郎全詩集』、泯々社、1997年、360-361頁を参照。）

<sup>51</sup> 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄（続）」、『植民地文化研究』6、植民地文化研究会、2007年7月、138頁。

<sup>52</sup> 口に出してあれこれ言う者より、口に出して言わない者のほうが、心の中では深く思っていることのたとえ。（拙訳）

<sup>53</sup> 潘秀榮「周作人と俗謡」、『周作人と日本古典文学』、厦門大学出版社、2014年、159頁を参照。

<sup>54</sup> 本家勇「古川賢一郎の覚書」『古川賢一郎全詩集』、泯々社、1997年、397頁。猪野睦「満洲詩人」のあゆみ（1）」、23-25頁参照。

<sup>55</sup> 西原和海編『古川賢一郎全詩集』、泯々社、1997年、160-161頁。詩の初出は『氷の道』、詩之家出版部、1932年8月。

<sup>56</sup> 西原和海編『古川賢一郎全詩集』、泯々社、1997年、15頁。詩の初出は『老子降誕』、詩之家出版部、1929年10月。

<sup>57</sup> 西原和海編『古川賢一郎全詩集』、泯々社、1997年、33頁。詩の初出は『老子降誕』、詩之家出版部、1929年10月。

<sup>58</sup> 西原和海編『古川賢一郎全詩集』、泯々社、1997年、123頁。

<sup>59</sup> 西原和海編『古川賢一郎全詩集』、泯々社、1997年、347頁。初出は『戎克』の第10号（1929年12月）であるが、『戎克』の原資料を入手できず確認不可能なため、ここでは西原和海の転載をそのまま引用する。なお、下線は稿者による。

<sup>60</sup> 日本語訳：「よそさまの女を提供しあの男とねさせると ああ男のものとなった女



は役人の相手をしてねた 強盗、土匪をあの男はほつておき 金を持たない人々に、罪を着せるだけ」（呂元明「日本人作家の植民地支配への抵抗—正義と良知による創作」『近代日本と「偽満州国」』、不二出版、1997年、325頁を参照。）

<sup>61</sup> 呂元明「日本人作家の植民地支配への抵抗—正義と良知による創作」『近代日本と「偽満州国」』、不二出版、1997年、325頁を参照。

<sup>62</sup> 日本語試訳：「警備隊、悪いことをしてばかり、よそさまのお酒を提供しあの男を酔わせる」

<sup>63</sup> 呂元明「日本人作家の植民地支配への抵抗—正義と良知による創作」『近代日本と「偽満州国」』、不二出版、1997年、325頁を参照。

<sup>64</sup> これらの言葉がそのまま詩に現れるのではなく、猪野氏の解釈を示しているものである。猪野睦「「満洲詩人」のあゆみ (2)」、『植民地文化研究』2、植民地文化研究会、2003年7月、60頁。

<sup>65</sup> 猪野睦「「満洲詩人」のあゆみ (2)」、『植民地文化研究』2、植民地文化研究会、2003年7月、60-61頁。

<sup>66</sup> ここでは大内隆雄の回想を直接引用する。『満洲文学二十年』、144頁。

<sup>67</sup> 守屋貴嗣『満洲詩生成伝』、翰林書房、2012年、259頁。

<sup>68</sup> 守屋貴嗣『満洲詩生成伝』、翰林書房、2012年、259頁。

## 参考文献

### 書籍：

飯田兼治郎『青年支那』（紅玉堂版、1931年）

伊藤武雄『満鉄に生きて』（勁草書房、1964年）

今枝折夫『満洲異聞』（月刊満州社、1939年）

巖谷國士『シュルレアリスムとは何か』（ちくま学芸文庫、2002年）

大内隆雄『満洲文学二十年』（国民画報社、1944年）

植民地文化研究会編『満洲国文化細目』（不二出版、2005年）

単援朝『漂洋過海の日本文学』（社会科学文献出版社、2016年）

西原和海編『満洲文芸年鑑別冊』（葦書房、1993年9月）

西原和海『古川賢一郎全詩集』（泯々社、1997年）

日本社会文学会『近代日本と「偽満州国」』（不二出版、1997年）

潘秀榮『周作人と日本古典文学』（厦門大学出版社、2014年）

『平林たい子全集』第1巻（潮出版社、1979年）

満洲事情案内所『満洲の伝説と民謡』（満洲事情案内所、1940年）

南満洲鉄道株式会社総務部資料課編『満鉄要覧』（南満洲鉄道、1932年）

守屋貴嗣『満洲詩生成伝』（翰林書房、2012年）

## 論文：

- 猪野睦「満洲詩人のあゆみ (1)」『植民地文化研究』創刊号 (植民地文化研究会、2002年 6月)
- 猪野睦「満洲詩人」のあゆみ (2)」『植民地文化研究』2 (植民地文化研究会、2003年 7月)
- 猪野睦「満洲詩人」のあゆみ (4)」『植民地文化研究』4 (植民地文化研究会、2005年 7月)
- 王占一「戦前戦時における中国民謡の機能：雑誌『満蒙』を中心に」『名古屋大学人文学フォーラム』1巻 (名古屋大学大学院人文学研究科、2018年 3月)
- 西田勝「プロレタリア詩誌『燕人街』の登場」『植民地文化研究』5 (植民地文化研究会、2006年 7月)
- 西田勝「『燕人街』(創刊号から第2巻第3号まで) 総目次」『植民地文化研究』5 (植民地文化研究会、2006年 7月)
- 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄」『植民地文化研究』5 (植民地文化研究会、2006年 7月)
- 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄(続)」『植民地文化研究』6 (植民地文化研究会、2007年 7月)
- 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄(3) 評論篇(上)」『植民地文化研究』7 (植民地文化研究会、2008年 7月)
- 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄(4) 評論篇(中)」『植民地文化研究』8 (植民地文化研究会、2009年 7月)
- 西田勝「新発見作品 詩誌『燕人街』抄(5) 評論篇(下)」『植民地文化研究』9 (植民地文化研究会、2010年 7月)
- 西田勝「漂洋過海の無産文学備忘録」(『東北亜外語研究』2期、2015年 7月)
- 西原和海・岡田英樹・西田勝「座談会 詩誌『亞』から『戎克』、『燕人街』へ」『植民地文化研究』7 (植民地文化研究会、2008年 7月)